

秋山真之の臨終

秋山真之
あきやまとさねゆき

秋山真之は大正七年、四十九歳で没した。慢性腹膜炎が増悪しての死去だつたといふ。枕頭に集まつていた人々に、「みなさんいろいろお世話をされました。これからひとりでゆきますから」と言い残して瞑目したといふ。

『坂の上の雲』の最後の情景である。おそらくは司馬遼太郎の創作なのであろう。そうであればみごとな創作だといふ他ない。真之という人物の生涯を凝縮させたような語りとなつてゐるからである。生死の中の日本海海戦で無数の兵士を死に追いやるながら、自分はなお生き延びている。その居住まいの悪さを真之は引きずつっていたのであろう。「独りでゆきます」という表現の中には、俺もそういう苦しさからやつと解放されるのだという安堵の気分が漂つてゐるよう感じられる。

葬儀に臨んだ兄の好古は、「兄として弟の死はただ悲しいだけだ。それに真之には兄として誇るべきことはない」と切り出し、さらにこう述べたといふ。

「しかし、ただひとつ、わたしからみなさまに申しあげておきたいのは、真之はたとえ秒分の片時でも“お国のため”といふ観念を捨てなかつた。四六時ちゆうこの観念を頭からはなさなかつたということです。このことだけははつきりと、兄としていいうることです」

公のためだけに生きた真之を、好古はどんなに尊い人生かと誇りたかったのであろう。この語りは、秋山兄弟の生誕地に復元された松山の住居で配布されている資料のなかにある。好古は陸軍大臣を経ながらも潔く降格の道を選び、故郷松山の北予中学校の校長として淡淡、酒を唯一の友に生きていた。

真之は、東郷平八郎をして「智謀湧くが如し」といわしめた明治を代表する、機略の軍人である。真之に関心を持つ人であれば、皆そのように思つてゐるに違ひない。私ももちろんそうだが、それでもこの一代の軍人が、今際の際まで何を抱え、そして死んでいつたのかを想像してみたいのである。自分の最期もそう遠くはないからであろうか。

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学・東京工業大学教授などを歴任。拓殖大学国際開発学部学部長、学長、総長などを経て二〇一五年十一月より現職。

渡辺利夫

(拓殖大学学事顧問)